

	<p>が育っていない。更に自尊心も高く、自分の興味、関心あるものだけに目を注ぎ、友人と協調して遊ぶようなことはしない。学校は自分だけが自由になるところでないの、集団帰属ができず、安住の場である家庭に逃避してしまい生じたものである。</p>	<p>○しかると筋肉の硬直が生じて動けなくなることもある。 ○学校のある日は家にひっこんでいる。 ・親に反抗し、言うことをきかない。</p> <p>・テレビマンガ等でぶらぶらと無為に過す。 ○休みの日は、家から出て行って遊ぶ。 ・友人が遊びに来るときげんがよい。</p>	<p>・両親の教育方針のちがいを正し、しつけの一貫性が保てるように援助する。 ・本人の家庭での役割分担を明らかにし、責任ある行動がとれるようにする。</p> <p>② 学校生活を魅力あるものにし、居心地よくするようにはからう。 ・係活動などで、努力したこと、よくできたことなどを多めにほめてやる。 ・趣味やスポーツの話をし、本人の活動を認めてやる。</p> <p>[中学生の場合]</p> <p>①本人の自立心をのばすように援助し、自我の成長をうながす。 ・必要以上に親が世話をやいたり、援助することをしないように指導する。 ここから先は口出しをしないという境界線をはっきりもち、それ以上は、本人の自主性と判断にまかせる。 ・子供にあえて危機的状態をつくって自覚をうながす。(親戚に泊りに行かせる。家の用事をたのむ等)</p> <p>②随時家庭訪問をし、雑談などをしながら本人との関係が深まるようにする。</p> <p>③休日に友人を訪問させ、心の緊張を解いてやる。</p> <p>④親の態度に変化がない時は、親から離し専門機関の治療を受けさせる。</p>
<p>優等性の息ぎれ型 (中学生に多く見られ、発症が急性である。)</p>	<p>○母親の過保護と生活支配によって、生活経験が乏しく自我の発達が阻害されている場合である。 登校を拒否する前は、「よい子」として育てている。自分のもてる能力をこえて周囲から期待をかけられ、本人も初めは、その期待にこたえようとして全力を尽し優等生として育つ。ある時、ほんのささやかな契機でつまづき、期待と自分の実力との間に大きな差があることに気づき、動きがとれなくなり、家の中に逃避したために生じたものである。</p>	<p>○発症が比較的急性で、初めは、断続的な休み方をする。 ○短期間に症状がすすむと、連続的に欠席する。 ○登校拒否の理由として、次のようなことを言い欠席する。 ・成績がふるわない。 ・先生にしかられた。 ・対人関係がうまくいかない。 ○欠席している時の状態 ・自室にとじこもり、出てこない。 ・家族とも口を聞かない。 ・人との接触をさけ、まったく外に出ない。 ・起床・食事・入浴・散髪などの生活習慣が乱れる。 ・昼と夜が逆転した生活になりやすい。 ・家族が家校のことをふれると荒れる。 ・先生や友人の訪問にも会おうとしない。</p>	<p>①登校刺激をさけ、情緒の安定を図り、心理的緊張の解消に努める。 ・友だちを迎えにやることをさける。 ・家庭訪問もひかえる。</p> <p>②担任と話し合える場合は、本人の話聞いてやり、気持ちを理解してあげる。</p> <p>③周囲でだまって時間を与え、自己決定を尊重し、思い切って、本人の意志にまかせる。</p> <p>④規律ある生活ができるように、自我の発達を援助する。</p> <p>⑤気がすむまで静養し、心理的な緊張が解けたならば、自分で立ち直りができるように援助する。</p>

3、おわりに

登校拒否は、いずれのタイプのものであっても、子供の性格や情緒の安定度、家庭の養育態度に関連が深い。一方、登校拒否の誘因や登校するようになったきっかけには、学校側に関係することも多く見られる。

指導や援助にあたっては、子供と教師との人間的な触れ合いを軸として、子供自身の内面に潜む悩みや問題を受け止め、家庭との連絡を密にしながら対処していくことが大事である。したがって、学級担任による 普段の子供理解が、きわめて大事な意義をもつと言えよう。